

「陽光輝く美しい田園に思いを馳せ」

菊畠茂久馬

ガンに冒されて、画業半ばで倒れた寺田健一郎の絶筆「ア ルル」。縦三十三センチ、横三十三センチ、四号の油絵。死の二ヶ月前の作品である。両の手で抱くと、胸に隠れるほどの小品だが、みずみずしい佳品である。

流れるような筆致

病院のベッドに寝たまま、片手でキャンバスを胸の上に立て、妻に絵具を付けさせた筆を握って描いた。キャンバスの裏には「一九八五年八月『アルル』寺田健一郎」と記されている。この世との別れのサインである。一年ほど前、小康を得て、妻とヨーロッパを旅した折に訪れた南フランスの古都「アルル」の陽光輝く美しい田園に思いを馳せて描いている。健一郎持ち前の筆致は、まだ流れるよう柔らかく、絵具はしっかりと画布についている。色彩は豊かに重なり、艶やかに響き合って、美しいピアノ小曲を聞く思いがする。この時、すでに健一郎のガンは骨盤の骨を溶かし、右股関節は完全に崩れてしまっていた。転移したガンは健一郎の肉体を日夜容赦なく打撲(ちょうちゃく)し、言語に絶する苦痛の淵にいたが、この絵のどこの片隅にも、死に脅えておののく筆はない。健一郎は昭和五十六年五十歳の春頃より、排便時に不調を覚えていたが、秘かに隠し続けてい

た。秋になると、しぶきのように飛び散る下血をしばしば見るようになり、ようやく福大病院で検診を受けた。直腸ガンであった。即入院、即手術。直腸を切断し、人工肛門をつける。翌五十七年一月退院。自宅療養に専念した甲斐あって、体力も次第に回復し、得意のエッセーなどに健筆を奮うまでになった。

壮絶なガンとの闘い

昭和五十九年春、妻や友人たちとヨーロッパを旅行したが、旅先で右足に痛みを覚えていた。帰国後の検査で、骨に転移が認められ再び入院した。これから妻と二人、スクラムを組んで、ガンに勇猛に立向う壮絶な闘いがはじまるのである。この様子は自らの文章や、テレビでも紹介されたが、あの温厚な顔を引きつらせ、身をのけぞらして温熱治療に耐えている姿、廊下まで響く健一郎の悲鳴には、胸塞がれる思いがする。

昭和六十年十月二十三日、ついに帰らぬ人となった。五十四歳であった。「太郎、黄太(二人の息子)お母さんを頼みます。みどり(妻)お前と出合えてほんとうによかった。楽しかったよ。子供たちをたのみます。ありがとう。寺田健一郎」。画家寺田健一郎旅立ちの遺書である。

寺田健一郎は昭和六年福岡市薬院に生まれた。男ばかり八人兄弟の長男であつ

た。寺田家は代々博多商人の家系で、履物商を営んでいたが、戦災で家を焼かれている。二十三歳の時、大黒柱の父を失い、経済的困窮の中、母を助け、七人の幼い弟たちをかばい、自らも結核で倒れたりと、戦中戦後辛苦の青春時代を生き抜いている。東京のマネキン会社に勤めていた折に知り合った鶴田翠を伴って帰福、昭和三十二年に結婚している。

美術学校には行かず、地元の画家伊藤研之に師事。二十歳の時早々と「二科」に入選を果たしている。昭和三十二年二十六歳の時、地元の暴れん坊集団「九州派」の運動に参加したが、終始喧騒に染まず、むしろ纖細な絵肌は荒れむしばまれていった。「九州派」を脱会し、集団の緊縛から開放された健一郎の絵筆は、この時を境に一気に水を得た魚のように、奔放な色彩が溢れ、流麗なフォルムが軽快な音色を響かせるようになる。脱会した昭和三十四年、二十八歳の時、ついに「二科」で特選を射止めた。この機に、「九州派」時代の作品をほとん焼却して再起を計っている。

多趣味、幅広い交友

昭和四十三年から昭和四十五年にかけて、三十七歳から四十歳を越えるあたりの作品は、健一郎生涯最大高揚期を思わせる。「太郎のトランプ」「ドン・キホーテ」「貝の花」「花の宴」「艶容」「作品赤」「タブー」「陽気な人」など、華やぎと

艶やかさ、気力充実した張りのある画面、どれも一級の作品たちである。

五十歳頃より、堰をきったようにエッセーや雑誌のカットなど描きまくり、レギュラーのテレビ出演と、身辺は俄に繁忙に包まれる。天性のコラムニスト、柔軟な感性、飄々とした風貌、酒を愛し、旅に遊び、料理の腕前は玄人はだし、天下周知の食通である。こんな絵描きを世間 は放っておかないと。

新聞記者、詩人、小説家、テレビ関係者、さしづめ現代の文人墨客たちが、ひっきりなしに訪れ、アトリエは連日連夜客人たちの楽しい笑い声に包まるようになる。

だが健一郎のうなじには、いつもどこかニヒリズムの香が立ちこめていた。自分と芸術の間をとり過ぎていた。健一郎は暗鬱な青春と、晩年は病苦見舞われたが、人生の真ん中には花園の中にいた。

(1996年2月2日付、西日本新聞『続絶筆いのちの炎』)

寺田健一郎 没後25年記念展カタログより